



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3195号 2016.8.19 発行

【衝撃事件の核心】「邪魔な存在」死亡3歳児の殺害認めた養父 「血縁のない親への偏見！」虐待否定から一転した真意

産経新聞 2016年8月18日



死亡した3歳児の体には30カ所以上のやけど・傷があった。逮捕された養父と実母は監禁容疑での逮捕前の取材に「自傷行為があった」などと虐待を否定していたが、殺人容疑で再逮捕された

堺市堺区のマンションで昨年6月、3歳の男児が救急搬送され、死亡する事件があり、大阪府警は今年7月、男児を自宅浴室に閉じ込めたとして、監禁容疑で養父の常峰渉（32）と実母の美香（23）の両容疑者を逮捕した。男児の体からは死後、30カ所以上のやけどや傷が見つかり、日常的な虐待を受けていた可能性が浮上したが、両容疑者は逮捕前の取材に「（男児には）自傷行為があった」と主張。「（渉容疑者と男児に）血がつながっていないから疑われるんや」と、育ての親への「偏見」

まで持ち出して虐待を否定した。ところが、今月17日に殺人容疑で再逮捕されると、渉容疑者の供述は一転。「風呂場に沈めた。正直、邪魔な存在だった」と殺害への関与を認め、真相を語り始めた。

未明に裸で救急搬送

「風呂で子供がおぼれて息をしていない」

昨年6月15日午前1時45分ごろ、美香容疑者の119番を受け、両容疑者の自宅マンションに救急隊が駆けつけた。

裸のまま心肺停止の状態でも搬送されたのは、長男の英智（えいち）ちゃん。搬送後に一時心拍を再開させたが、同月18日午後、わずか3歳2カ月の短い生涯を閉じた。

大阪府警は消防から通報を受け、両容疑者が英智ちゃんの死亡にかかわった可能性があると捜査を開始。マンションを検証するとともに、英智ちゃんを司法解剖して死因を調べた。

司法解剖の結果、死因は、窒息によって心臓が停止し、脳に酸素が回らなくなる「低酸素虚血性脳症」。両容疑者は「（英智ちゃんは）風呂でおぼれた」と説明したが、解剖結果との整合性から2人の説明に疑義が生じた。

水死の場合、通常は飲み込んだ水が大量に肺に入って膨れ上がる。しかし、英智ちゃんの肺には確かに水は入っていたものの、水死にしては少量だった。

加えて、英智ちゃんの全身からは大量の傷が見つかった。傷のうち、新しい傷が十数カ所で、やや古い傷は20カ所以上。たばこを押し当てられたようなやけどの痕もあった。

捜査の手に「苦痛」と涙

解剖結果から、両容疑者が英智ちゃんを日常的に虐待していた可能性が浮かんた。ただ、両容疑者は一貫して虐待を否定した。

両容疑者は、府警の任意聴取で、英智ちゃんの傷について「壁やテーブルの角に自分で

ぶつかったりしていた。やけどもたばこを吸っていたら、近寄ってきて当たってしまった」と英智ちゃんの自傷行為が原因と訴えたのだ。

涉容疑者は、マンションの住人に対しても、警察の捜査を受けている“苦痛”を口にしていた。

英智ちゃんが死亡した数日後、同じマンションに住む女性は、マンションのごみ捨て場で、暗い表情を浮かべている涉容疑者と鉢合わせた。

「子供さん、どうかしたの」

救急車が来ていたことを心配して声をかけた女性に対し、涉容疑者は涙を流しながら答えた。

「子供が死んでしまって葬式の準備をしている。警察に虐待を疑われ、ずっと事情を聴かれた。『殺人』とか言われて辛い」

「やんちゃ」「肌弱い」

両容疑者は今年1月下旬、産経新聞の取材に対しても同様に虐待を否定していた。両容疑者の主張する英智ちゃんが搬送された経緯は次の通りだ。

《事件当日は最初、両容疑者と英智ちゃん、2歳の長女の一家4人で風呂に入っていた。美香容疑者と長女は先に浴室から出て、寝る準備を始めた》

《涉容疑者と英智ちゃんは引き続き入浴していたが、涉容疑者が途中でトイレに行き戻ってきたところ、英智ちゃんが浴槽の中でうつぶせで浮かんでいた。涉容疑者は、英智ちゃんを逆さにするすようにして水を吐かせ、人工マッサージをしたが、意識が戻らないため、美香容疑者が救急車を呼んだ》

両容疑者は当日をこう振り返った後、多数の傷が見つかった英智ちゃんへの虐待の関与を否定した。

涉容疑者「自ら『イッー』って言いながら壁に頭をぶつけたり、物にかみついたりしていた。夜中、勝手に家から抜け出してしまうこともあった」

美香容疑者「(英智ちゃんは) やんちゃな性格で、自分の顔をひっかいたり、浴室でボディソープを洗い場にまき散らして、自分で滑って転んで頭を打ってしまったことがある。長女と比べて肌が弱く、少し何かぶつかってしまっただけでもあざができた」

そして、府警の捜査を批判し、子供をいかにかわいがっていたかを強調した。

涉容疑者「警察署では長時間事情を聴かれ、精神的に追い詰められた。(英智ちゃんと) 血がつながっていないから疑われたんや。なんで虐待とか言われなあかんねん」

美香容疑者「旦那(涉容疑者)は仕事で忙しくても、英智のことをかわいがっていて、子供服をたくさん買ってあげていた。血がつながっていないから疑われるなんて偏見だ」

浴室の“細工”には…

両容疑者は府警の任意の調べに対しても同様の供述を繰り返した。その上、英智ちゃんの死因からは暴行があったとは断定できず、捜査は難航した。

そんな中、府警が「最も手堅く立証できる」(捜査幹部)として選んだのが、監禁容疑での事件化だった。発生から1年以上が経過した今年7月27日、府警は両容疑者を監禁容疑で逮捕した。

2人の逮捕容疑は昨年6月14日午後3時15分～同日午後7時45分ごろまでの間、英智ちゃんを自宅浴室に監禁したとしている。

捜査1課によると、両容疑者宅の浴室の扉は本来、内側と外側の鍵が連動し、内側からも外側からも鍵の開閉ができるタイプだった。しかし、府警が扉を調べたところ、浴室内側の鍵のつまみが外され、外側からしか鍵が操作できないように細工されていた。

両容疑者は、この細工について「子供が遊んで内側から鍵を閉めてしまうことがあったので、危ないから外していた。外側のつまみも外してしまうと、(扉が勝手に開いて)水が外に漏れ出してしまうので、外側はそのままにしていた」と監禁目的を否定した。

単に苦しい弁解に過ぎないのかもしれないが、両容疑者の供述の矛盾を突き崩すには至らなかった。決定打となったのは、防犯カメラの映像だった。

両容疑者は任意捜査の段階で、英智ちゃんを浴室に閉じ込めたとされる約4時間半の間の行動について、「家族みんなで買い物に出かけていた」と説明していた。ところが、府警がマンション周辺の防犯カメラを調べた結果、映像に写っていたのは両容疑者と長女の姿だけで、英智ちゃんの姿は確認できなかったのだ。

さらに、事件1週間前の昨年6月6日までさかのぼって防犯カメラを解析しても、英智ちゃんの姿は一切写っていなかった。

英智ちゃんは6日以降、通っていた保育園に顔を出さなくなっていた。美香容疑者は、保育園に「本人が行くのを嫌がっている」「体調が悪い」と欠席の理由を伝えていた。

実は保育園は4月下旬、英智ちゃんの体に傷を見つけ、堺市の児童相談所「堺市子ども相談所」に通報。英智ちゃんは児相に一時保護されていた。こうした経緯から、府警は児相への通報を避けるため、両容疑者が英智ちゃんを外出させないようにした可能性があるともみている。

児相がたびたび介入

ただ、両容疑者と児相の間ではこれ以外にも、英智ちゃんをめぐる複雑なやり取りがあった。

児相によると、英智ちゃんとのかわりが始まったのは、英智ちゃんが生まれてわずか3カ月後の平成24年7月。美香容疑者の親族から「養育は困難」との連絡を受けたからだ。

当時、美香容疑者は渉容疑者と結婚する前。別の男性との間に生まれたのが英智ちゃんだった。児相は英智ちゃんを施設に入れたが、その後結婚した両容疑者から25年7月、「自分たちで育てたい」と申し出があった。児相は2人と面会などを重ねた結果、事件発生3カ月前の昨年3月下旬、英智ちゃんを2人の元に戻すことにした。

ところが、わずか1カ月後の4月下旬、前出のように保育園から虐待を疑う通報があり、児相は英智ちゃんを一時保護した。両容疑者への聞き取りなどから虐待の有無を調べたが、一貫して「英智ちゃんによる自傷行為」を主張する両容疑者の説明に矛盾はないと判断。翌5月12日に一時保護を解除し、自宅に戻した。

それでも通報は続いた。

保護解除から1カ月にも満たない6月1日、今度は堺市の職員から「額などにやけどの痕がある」と連絡が入った。児相の職員は両容疑者宅を訪れ経緯を聞いたが、2人は「揚げ物の油にみそ汁が入って、それがはねた」と釈明。児相はそれをうのみにし、再度の保護を見送った。

児相は以降も、美香容疑者から子育てに関する相談をたびたび電話で受けながら、不審な点に気付かないまま事件の発生を迎えた。

児相の深田仁志所長は「保護者の説明と子供の状況に齟齬（そご）や不審点はなく、当時は虐待はないという判断以外はしよがなかった。今後、当時の判断を検証したい」と述べた。

最初の逮捕当初、監禁容疑を否認していた両容疑者だったが、途中から一転し、「今まで何回も繰り返し浴室に閉じ込めていた」と日常的な監禁を認め始めた。

こうした状況から、府警は8月17日に両容疑者を殺人容疑で再逮捕した。美香容疑者は「私は何もしていない」と否認したが、渉容疑者は「私が殺してしまいました」と認め、英智ちゃんを「邪魔な存在」とまで言及した。府警は今後、殺害の経緯をさらに詳しく調べる。

匿名、悼まれる機会失った ダウン症の弟がいる弁護士 村山恵二

朝日新聞 2016年8月18日

香川県で暮らす弁護士の佐藤倫子さん（41）の弟、理一（まさかず）さん（39）は最重度の重複障害者だ。脳性まひとダウン症で、最近では耳も聞こえない。佐藤さんは相模

原市の障害者施設「津久井やまゆり園」の惨劇の報に触れ、「弟は、事件で標的にされた方々と全く同じ境遇にある」と思った。

6月に仕事で相模原市を訪れたという佐藤倫子さん。事件の報に触れ、「あの相模原で」と驚いたという＝香川県丸亀市



事件の3日後、母キクさん(67)に電話してみた。「被害者の方たちは、息子にしか思えない」。キクさんはインターネットで事件のことを検索する度に、障害者をおとしめる植松聖(さとし)容疑者(26)の考えや、同調する人たちの



の心ない言葉に傷ついていた。「息子を施設に入れた自分を責めてしまう」と、電話口で泣いた。事件のことばかりを考えてしまうので、裁縫に没頭するようにしていると、母は言った。

電話を切った後、佐藤さんも涙があふれ出てきた。弟が何者かに刺される様子が目に浮かび、悲しくて悲しくて、どうしたらいいのか分からなくなった。

理一さんは2年ほど前に水戸市内の障害者施設に入るまで、家族と暮らしていた。佐藤さんは身の回りの世話をし、買い物で一緒に外出もした。岩手県で働いた4年半は、両親と理一さんを連れて行った。

2007年2月、香川県の金比羅宮で結婚式を挙げた時も、参列してもらった。「ショートステイに出すんですか」と聞く人もいたが、「一生で今回しか弟に会わない人がたくさんいるだろう。ならば、一人でも多くの人に弟を知ってほしい」と考えた。

佐藤さんは今回の事件で犠牲になった人たちが、それぞれに思いが込められた名前を持ち、顔も体も、出来ることも出来ないことも、好きなものも嫌いなものも違い、それぞれ違った歴史を持っていたはずだと考えている。だから、神奈川県警が被害者の名前を発表しなかったことに、強い疑問を感じるという。

社説:【障害者殺傷事件】予断挟まず慎重な議論を 高知新聞 2016年8月18日

神奈川県相模原市での障害者施設殺傷事件を受け、厚生労働省が検討チームを設置し、再発防止に向けた議論を始めた。秋にも対策をとりまとめる。

19人の死者、27人の負傷者を出した重大事件である。なぜ防げなかったかを十分に検証した上で、幅広い視点で再発防止への教訓を導き出す必要がある。

事件による犠牲の大きさはもちろん、障害者の尊厳を著しく踏みにじる独善的でゆがんだ動機は、国内ばかりでなく海外まで衝撃を与えた。差別や偏見に基づいたヘイトクライム(憎悪犯罪)にはほかならないからだ。

事件から約3週間たち、状況が徐々に明らかになってきた。

現場となった施設の元職員である容疑者は、犯行前から障害者に危害を加える趣旨の発言を繰り返し、施設を退職。自分や他人を傷つける恐れから精神保健福祉法に基づいて措置入院となり、3月に解除されていたことなどだ。

こうした経緯を踏まえ、安倍首相は関係閣僚会議で、施設の防犯体制強化や措置入院の運用見直しを検討するよう指示した。専門家や関係省庁からなる検討チームの議論でも課題となっている。

確かに容疑者が退院した後、継続的な治療といったフォローはなかった。私たちも重要な論点であることは否定しない。

ただし、事件にはまだ不明な点が多い。なぜゆがんだ考えを抱き、むごたらしい犯行に及んだのか。容疑者に対する疑問が解消されたわけではない。

容疑者は入院時に加え、逮捕後も大麻の陽性反応が出ている。ヘイトクライムが精神障害によるのか、薬物の影響なのか、そもそもの思想が原因なのか、しっかりと見極めなければならぬ。それには一定の時間を要するはずだ。

拙速に議論を進めれば、地域で暮らす精神障害者や家族への差別、偏見を助長する恐れも出てくるのではないか。

むろん犯罪防止は重要だが、重視しすぎれば患者へのケアを理由に入院期間が長期化したり、過度な監視につながったりする懸念もある。患者の人権に関わるだけに、慎重に議論を積み重ねたい。

措置入院の在り方のほかにも、検証されるべき問題はあろう。関係機関の間で情報が十分に共有されていなかったことだ。

入院先の病院は容疑者の大麻使用を警察に伝えていなかった。大麻取締法に使用の罰則がないとはいえ、情報があれば危険性の判断材料にできた可能性がある。

容疑者が衆院議長公邸に持参した事件を予告する手紙についても、警察から施設に連絡はしたものの、詳細は知らせず、危機感の共有には至らなかったようだ。

結果の重大性からして予断を挟むことなく、あらゆる角度から検証する姿勢が求められる。

社説：ホーム転落事故 視覚障害者の安全を守りたい 読売新聞 2016年08月19日

東京の地下鉄駅で、視覚障害者の男性が線路に転落し、電車にひかれて死亡した。痛ましい事故である。再発を防がねばならない。

現場となった東京メトロ銀座線の青山一丁目駅ホームは、幅が3メートルしかなく、複数の太い円柱も立っている。盲導犬を連れて歩いていた男性は、柱の手前でホームの端に近付き、足を踏み外したという。

盲導犬には線路側を歩かせることが多いが、事故時は逆側にいた。危険を察知した駅員が線路から離れるよう放送で注意喚起したものの、事故を防げなかった。

視覚障害者のホームからの転落事故は年70件以上、発生している。視覚障害者の4割近くが転落を経験しているとの調査結果もある。対策に猶予はないことを、全鉄道事業者は認識せねばなるまい。

転落防止に最も有効なのはホームドアだが、今回の現場には設置されていなかった。

国土交通省は、1日の利用客が10万人以上の駅には優先的に整備するよう、5年前から鉄道事業者に求めてきた。しかし、該当する全国251駅のうち、設置済みの駅は3割に過ぎない。

整備が遅れている理由として、事業者は多額のコストを挙げる。JR東日本が進める山手線の全29駅への設置には、550億円を要するという。容易に賄える額ではないのも事実だ。

ホームによっては、強度や広さといった構造上の問題もある。複数の事業者が相互に乗り入れる路線では、車両の扉の位置が一定しないという事情も指摘される。

一方で、様々な工夫も講じられている。一般的なスライド式ホームドアではなく、バーやロープで遮る方式を導入した駅がある。費用や重量を大幅に減らせるのがメリットだ。車両に応じて開閉位置が変わるドアの開発も進む。

4月には、東京メトロの別の駅で、ベビーカーを扉に挟んだまま電車が発車する事故があった。これもホームドアが設置されていれば防げていた可能性が強い。

官民でさらに知恵を絞り、整備を加速させてほしい。

設置がどうしても困難な駅では、駅員の支援がより重要だ。東京メトロは障害者への積極的な声掛けを各駅に通知した。

利用者にも、目の不自由な人が近くにいたら、注意を促す心配りが求められよう。危険なのは「歩きスマホ」だ。視覚障害者に衝突し、思わぬ事故を招きかねない。厳に慎みたい。

【主張】ホーム転落事故 利用者本位の対策を急げ 産経新聞 2016年8月19日

視覚障害のある男性がホームから転落し、電車にはねられ死亡する事故が起きた。

目の不自由な人にとってホームは「欄干のない橋」にたとえられ、痛ましい事故が繰り返されている。なんとしても止めたい。

そのため、障害者や高齢者ら利用者の視点に立って再点検し、さらなる安全対策を急ぐべきだ。

事故は今年15日夕、東京メトロ銀座線青山一丁目駅で起きた。防犯カメラの映像などによると、男性は盲導犬を連れ、点字ブロック上を歩いていたが、次第にホーム端に寄り転落した。点字ブロックを遮る形で柱があり、避けようとした可能性があるという。

再発防止のためにも、専門家や視覚障害者の団体などの協力を得て事故原因を詳しく調査してもらいたい。

5年前、JR目白駅で全盲の男性が転落し電車にはねられ死亡する事故があった。視覚障害者がホームから転落する事故は全国で平成26年度は80件に上る。視覚障害者の約4割が「転落の経験がある」という調査もある。

転落事故防止のため、可動式ホームドア設置は有効だ。鉄道各社は設置を進めているが、国土交通省によると1日10万人以上が利用する全国約250駅のうち、設置駅はなお約3割にとどまる。

複数の会社路線が乗り入れている場合、車両のドアの位置が異なるほか、駅によってはホームの基礎工事からやり直す必要があるなど簡単ではない。だが、命を守るため、できる対策は着実にやりたい。事故を教訓とし、さらに設置を加速すべきだ。

施設改善のハード面の対策とともに、障害者や高齢者らをサポートする周囲の見守りも欠かせない。お手伝いしましょうか、とためらわずひと声をかけたい。

ホームの点字ブロックの上に、あたりまえのように並んで電車を待っていないか。歩きスマホは、自身にも他の人にとっても大変危険である。

2020年東京五輪・パラリンピックに向け、バリアフリー化など施設整備が進められているが、根本的な安全対策をいま一度再点検してほしい。

その際、施設管理者の都合でなく、障害者など実際に使う人たちの声を聞いて行うことを忘れないでほしい。

社説：ホーム転落事故／視覚障害者が安全な駅に 神戸新聞 2016年8月19日

東京の地下鉄の駅で目の不自由な男性がホームから転落し、電車にひかれて死亡する事故が起きた。男性は盲導犬を連れていたが、誤って線路に転落した。

転落事故はこれまでも繰り返されてきた。日本盲人会連合が2011年に視覚障害者を対象に実施したアンケートでは、36%が「転落した経験がある」と回答している。

この春、障害者差別解消法が施行された。障害のある人の社会参加を阻む「壁」を取り除くことを目的とする。鉄道事業者は、ホームの危険性が目の不自由な人の移動を阻んでいる現実をこれまで以上に重く受け止め、対策を講じる必要がある。

設備面の対策として取り組まれているのが、ホームの端を確認しやすい特殊な点字ブロックと転落防止用のホームドアの設置である。中でも効果的とされるのがホームドアだ。国土交通省も、1日に10万人以上が利用する駅で優先して整備するよう求めており、今年3月末までに全国665駅で設置されている。

天井近くまですっぽり覆うタイプや高さが腰高以下の柵、バーやロープを使ったものな

いろいろな形があり、企業の開発の動きも広がる。

ネックは数億円から十数億円かかるコストの高さだ。国と地方自治体が3分の2を補助する制度があるものの、設置数は伸び悩んでいる。

今月、政府が「未来への投資」として発表した経済対策にホームドア設置の推進が盛り込まれた。悲劇を繰り返さないため、取り組みを急ぐべきだ。駅の利用者を対象にした国交省のアンケートで、運賃での設置費用の負担に約6割が賛同していることにも注目したい。

ただ、それだけでは事故をなくせない。8年前、全盲の落語家、笑福亭伯鶴さんが大阪の駅でホームから転落、重体に陥る事故があった。自身も視覚障害者のライター、川田隆一さんは本紙にこう寄せた。

「社会全体で私たち視覚障害者の安全を見守ってもらえないだろうか。『大丈夫ですか』と声を掛けてほしい。恥ずかしければ、そっと見ていてくれるだけでいい。設備だけで事故はなくせない。どうしても、人の手助けが必要なのだ」

駅員、乗客。駅やホームに居合わせた一人一人の見守りや声掛けが命を救うことにつながる。障害者の安全に心を配りたい。

社説：働き方改革 看板掛け替えではなく 北海道新聞 2016年8月18日

安倍晋三首相は働き方改革を第3次再改造内閣の「最大のチャレンジ」と位置づけている。9月から有識者を集め、議論を始める。

「女性活躍」「地方創生」「1億総活躍」。首相は内閣を改造するたびに看板政策を打ち上げ、担当大臣を置いてきた。

どれももっともらしい名称だが、重複する仕事が多く、成果もはっきりしない。

働き方改革は、同一労働同一賃金や長時間労働の是正など、国民の暮らし、命に直結する重要なテーマを扱う。

看板の掛け替えで目先を変えるだけでなく、誰もがいきいきと働きやすくなるように改革を進めることが必要だ。

働き方改革は1億総活躍の柱の一つとの位置づけで、加藤勝信1億総活躍担当相の兼務だ。加藤氏は女性活躍も担当している。

これまでの看板政策はいずれも「道半ば」の印象がある。働き方改革はそうならないよう求めたい。

首相は「非正規という言葉がこの国から一掃する」と意気込む。正規、非正規にかかわらず、同じ仕事に同じ賃金が支払われるのは、当然の流れと言える。

先行する欧州諸国と違って、日本の正社員は長期雇用を前提とした年功賃金を中心だ。

他国との単純比較はできないものの、格差是正に向け、非正規労働者の賃金、待遇を正社員並みに底上げすることは、優先して取り組むべき課題だ。

昨年、働き方にかかわる二つの法律が成立した。

一つは改正労働者派遣法だ。派遣労働者の受け入れ期間はそれまで最長3年間に制限されていたが、企業が働き手を3年ごとに入れ替えれば、派遣のまま使い続けることができるようにした。

もう一つの同一労働同一賃金推進法は、責任などに応じてバランスが取れていれば、同じ仕事でも派遣労働者と正社員の賃金格差を認める内容だ。野党案を与党が修正し「骨抜き」と批判された。

「非正規という言葉を一掃する」どころか、不安定な非正規という働き方の固定化を進めてきたと言われても仕方がない。

今後の議論では、長時間労働の是正、高齢者や女性の雇用促進に加え、時間ではなく成果に応じて賃金を決める「脱時間給」や、解雇を金銭解決する制度も検討課題にすべきだとの声がある。

働く人たちの権利と暮らしが幅広く守られるよう、改革の方向性を注視したい。

予算編成始動／不安が先立つ概算要求基準

河北新報 2016年08月19日

1千兆円を超える借金を抱える国なのに、これで財政の立て直しが進むのか。今や政権の看板政策となった子育て・介護支援に、継続して取り組むための「礎」をこの予算の中で築くことができるのかどうか。いずれに関しても、疑問と不安が先に立つ。

政府が決めた来年度予算の概算要求基準を見ると、省庁が8月末までに提出する要求を財務省が厳しく査定し年末に編成が本格化するとはいえ、このスタート時の「緩さ」と「不確実さ」が気になる。

まずは財政再建である。

基準はそもそも歳出の膨張を抑制するため、要求に歯止めをかけるのが目的だ。歳出総額の上限を示すのが通例だったのが、景気に応じ柔軟に予算が組めるようにと、安倍政権下では4年連続で上限設定が見送られた。

要求総額は3年続けて100兆円を超える見通し。これでは基準という規律が完全に空洞化したと言うほかない。

消費税増税の再延期を決めても、政権は、2020年度に国と地方の基礎的財政収支を黒字化すると財政健全化目標を堅持した。

過去10年以上も例がない名目成長率3%以上の高成長を前提に、内閣府が7月にまとめた財政試算でも20年度収支は5.5兆円の赤字見通し。目標実現の道は険しい。

しかも、この赤字幅は1月の試算より1兆円も少ない。その違いは7月試算が、来年度予算の歳出抑制をも前提にしているからだ。

であるなら、予算編成を始めるに際し、厳しい規律を構えて臨むのが当然なのではないか。参院選での大勝を背景に、年末にかけ与党の歳出拡大圧力が強まる恐れもある。これでは、健全化目標の達成はますます遠のきかねない。

概算要求基準では、1億総活躍プランや成長戦略に充てる約4兆円の特別枠が設けられた。財源は公共事業を含む裁量的経費を本年度当初予算額から10%削って捻出する。

特別枠で予算にメリハリをつけると言えば、聞こえはいい。だが総活躍プランの目玉として、来年度から取り組む保育士や介護職員の待遇改善の継続性という観点から言えば、大きな不安を覚える。

保育士の給与を月額で平均6千円、ベテラン保育士は4万円上げ、介護職員も1万円の賃上げを図る。その実施は来年度にとどまらず、翌年度以降も継続され上積みされていかなければ、全産業平均との賃金格差は埋まらない。

恒久財源という礎を17年度予算でしっかり確保しなければならない。だが概算要求ではそのめどすら立たない。ほかの予算を削りひねり出す財源は不確かであり、これが毎年度続くとすれば子育て・介護を巡る不安は和らぐまい。

「経済再生なくして財政健全化なし」「アベノミクスの成果を再配分する」。安倍政権にとって財政再建も総活躍社会実現も経済成長が前提だ。が、それらに充てる税収は景気次第。故に予算編成は綱渡りとならざるを得ない。

「成長第一」の経済財政運営を改めずして、財政再建を図ることも、子育て・介護支援の安定財源を手当てすることも難しいのではないか。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

